

第5回動物福祉市民講座 質疑応答

先生方へ寄せられた質問へのご回答をいただきました。

ご回答ありがとうございました。

【佐伯先生からのご回答】

〔質問1〕

- 狂犬病は人獣共通感染症なのに、狂犬病のワクチンを犬だけに毎年義務付けているのはなぜですか？

(佐伯先生)

日本においては狂犬病予防法に定められているからです。

理由は法律ですので・・・としかお答えようがありません。

狂犬病発生時には猫も犬と同様の対応になる可能性があります。

科学的には、猫は集団を作りにくく、猫の間では狂犬病の感染が維持されにくく単独の発生で終わる可能性が高いとされています。しかし、犬は群れを形成することが多く、狂犬病が維持されやすい点で、狂犬病対策としては、世界的な状況を見ましてもより重要であると言えます。狂犬病発生国では、牛や馬などの家畜、犬・猫・フェレットも義務付けられているところもあります。世界的な発生状況では、発展途上国では、人への感染の原因には犬が圧倒的に多く、先進国では野生動物からの感染が多い傾向にあります。

〔質問2〕

- 現在、愛犬の駆除剤は服薬（シンパリカトリオ）を処方されています。以前にフロントライン使用時、背中への添付を犬が嫌がったためです。服薬でもダニには有効なのでしょうか。

(佐伯先生)

ダニにも有効です。

ただ、SFTSの予防効果があるかはつきりとは分かりません

それは、経口の薬は、マダニがイヌに付き、血を吸いだしてから効果が出ますが、SFTSウイルスが吸血してからどれくらいでマダニから犬の体内へ入るかが分かっていないからです。ただ、マダニを介して感染するウイルスでは、1時間以内とされていますので、薬の効果が出る前に感染してしまう可能性はゼロではありません。

〔質問3〕

- 今後、鳥インフルエンザによる人獣共通感染症が問題になる可能性があると思いますが、その予防（動物園や水族館、ふれあいカフェなど）について教えて頂ければと思います。

（佐伯先生）

インフルエンザウイルスは変異が起きやすいため、様々な動物への感染や病原性が報告されています。しかし、いくつかの勘違いもあるのも事実です。「高病原性鳥インフルエンザ」と言われますが、これは特定の鳥の種類に対して病原性が強いことを意味していて、人や他の動物への病原性ではありません。

また、いくつかの少数の感染例と感染の流行とは区別して考えるべきだと思います。閉鎖空間や個体密度の高い状況では、危険性は高まりますが、そうでなければ、一部の鳥の種類以外は感受性は高くはありません。

また、鳥インフルエンザには、野生の渡り鳥が大きく関与していますので、飼育動物への感染に対しては野鳥対策が重要だと考えています。